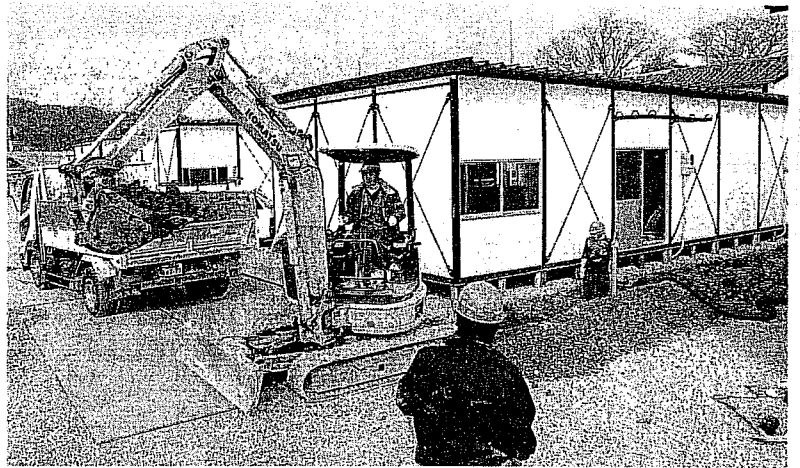


新聞新報

2007年(平成19年)4月11日 水曜日

仮設住宅 建設急ぐ 能登地震



進められる仮設住宅建設(10日、輪島市門前町館で一細野登撮影)

能登半島地震の被災者向け仮設住宅への入居の申し込み受け付けが13日、石川県輪島市で始まる。仮設住宅の建設は急ピッチで進み、今月下旬にも完成する予定だ。

石川県は当初、仮設住宅80戸を計画したが、その後、自治体などから増設の要望が相次いだため、現在は輪島市で250戸、七尾市で15戸、穴水町で45戸、志賀町で19戸の計329戸の建設が進められている。1DK(1人用)から3K(4~6人向け)まで3タイプを用意。4月下旬から5月上旬に完成する。

このうち、30戸が建設される輪島市門前町館では、既に全戸分のプレハブが持ち込まれて外観は完成、作業員らが排水溝の設置作業などを行っている。

能登半島地震で大きな被害を受けた石川県輪島市門前町地区にある市立の2小学校で児童の多くが心理的な圧迫や不安を訴えていることが

輪島市調査

地震の恐怖消えぬ児童

10日、同市教委の調査でわかった。ちょっとした音に驚いたり、地震のことが気になってしかたがないと訴える児童は4割前後にのぼる。心的外傷後ストレス障害(PTSD)につながる恐れもあり、同市はスクールカウンセラーを配置するなどの対応をとり始めた。

調査は、市内の小中学校全17校を対象にしたもので、門前町地区の門前東小(児童134人)と門前西小(児童75人)の2校では始業式があった9日にアンケートを行った。

「地震の夢をみた」、「なかなか集中できない」など20項目から複数選択方式で児童に回答を求めた。両校とも最も多かったのが「地震のことを早く忘れてしまいたい」(門前東小52人、門前西小38人)で、次に「ちょっとした音にも驚く」(同49人、34人)と「地震のこ

PTSD対策 カウンセラー配置も

とが気になってしかたがない」(同42人、33人)の回答が続いた。

門前東小6年の女子児童(11)は先月25日の地震発生時、校舎4階の集会室で着替え中に激しい揺れに襲われ、「友達が消えたようになり、自分も死んじゃうかも」という恐怖を感じたといい、幸いけがはなく自宅ですらすが、朝礼で集会室に行く、「自分の気持ちをコントロールできない」と漏らす。

同小5年の女子児童(10)も「2、3日に1回は地震で家の下敷きになったり、避難所について大きな地震が来たりする夢を見る」と話す。

同小の谷内加映校長(57)は「予想以上に不安を感じている児童が多い」といい、門前西小の角間邦夫校長(52)は「子どもの反応を敏感にとらえるようにしなければ」と危機感を持っている。

両校では9日から数日間、スクールカウンセラーを常駐させ、児童の様子を見守っている。